

以下の記事を読み、コメントを書いて下さい (800 字以上)

=>授業では十分に触れることができませんでしたが、それぞれよい批判的読解をした上でのコメントがあったと思います。ぜひ他の受講者のコメントを読んでみて自分との視点の違いを検討してみてください。次回以降、コメントにある多様な論点に触れられるように講義方法を改善していきます。

池袋のマクドナルドで本記事の筆者が出会った二人のホームレスギャルたちは、「移動キャバクラ」を生業にしているのだという。移動キャバクラとは、従来の店舗型とは異なり、路上で捕まえた客を居酒屋に連れ込み接待をし、その対価として料金を受け取る、という業態をとるらしい。ホームレスギャルの名はそれぞれリナとマイカといい、1991 年生まれの大阪出身であること、外国人の血が入っていることが二人の共通点だ。二人の生い立ちにはドラッグや家庭内暴力、援助交際といったある種「わかりやすい」キーワードが並んでいる。

ここでいう「わかりやすさ」とは、ステレオタイプを指す。いつの時代にもいる、家庭環境に恵まれず不良になり、転がるように道を踏み外していく少年少女たち。ホームレスギャルという耳慣れない単語は、私たちに何か新しいものの登場を感じさせる。しかしその一方で、二人の生い立ちを掘り下げることによって、彼女たちもまた幾多の非行少女たちの成れの果て、その一類型に過ぎないという印象を読者に与えてしまっていないだろうか。

また、筆者は「移動キャバクラ」という業態を現代社会を捉える新たな現象として提示しているが、その際に用いられている「フリーランス化」や「セーフティーネットからの排除」といった観点は、水商売や店舗型風俗との比較においては有効だが、従来の援助交際と何が違うのか、いまいち明確化されていないように思える。

さらに、ホームレスギャルたちのいかにも現代の若者風といった貧困な語彙による会話の描写も、彼女たちを筆者の言う「わかりやすく貧困を象徴する被写体」、従来型の貧しさのステレオタイプに閉じ込めることに一役買ってしまっている。

週刊ダイヤモンドの中心読者層であるビジネスマンのオジサマ方にとってはこのままでも十分に新しく刺激的な読み物かもしれないが、「わかりやすい」物語に回収されてしまっていることに物足りなさを感じた身としては、定点観測的に数年後の彼女たちの姿を追うことで、この現象の新鮮さが事後的に証明されることを期待したい。

少し衝撃的な内容だったが、読んでいるうちに「ああ、やっぱりそういう風な生活者もいるのか」と、自分で納得できたところに驚いてしまった。祖母の話を知ると、貧しさ・貧困といったものは戦後復興期まで物量的なものであると確信がありました。個人的な興味で近代化、もしくは高度に発展した都市・国家に於ける犯罪などを調べたが、やはり物量的な犯罪、例えば強盗などよりも、人々の精神異常から引き起こされたような異常犯罪の割合が高かった。ホームレスギャルだけでなく、お金がある、身分がある、全てがそろっている、だけれども満たされないと感じている人間が現代社会では多いと思っている。もっと突き詰めて暗部を辿っていけば、やはり生い立ちや、生活環境も要因になっているだろう。同和問題、差別問題、虐待、ネグレクト……そう

いった「売春島」的に「無かったこと」にされたり、あたかも存在していない風潮や、報道のタブーとなる現代のマスメディアの現状を見れば、高高度に発達した社会の暗部が明るみに出ないのは、そういったものの根本的解決の妨げにしかなくなっていると感じる。もちろん、非常に危険な線を踏み越える話になってしまうが、誰かがそういった暗部にメスを入れていかなければ、日本が抱える異常で奇妙な状況は打開されないだろう。

ホームレスギャル以上に、現代人は精神的に未成熟であり、また弱者であると思っている。戦後からバブル崩壊まで、社会はある種「飢えている」人間によって造りかえられてきた。しかし、現在ではこれ以上の発展を望むのは難しくなっている。なれば、人は物質的な欲求を満たすしかなくなるし、それが精神的に満たされていると錯覚している。このホームレスギャルやネトマ難民といった問題は通過点でしかなく、更に上の驚愕と異常さを体現する社会問題が出るのは目に見えている。故にイグニッションな切欠を作れるように、我々はもっと暗部やタブーといった知らなければいけないことを自主的に知るべきなのだろうかと感じる。

文中で語られなかったこととして、「移動キャバクラ」は当人にとって貧しい行為なのかどうか、という問題があるように思う。

中間集団の解体に伴う個人化の促進が「高付加価値型人材」から社会的「はぐれ者」にまで及び、貧しさ/豊かさの絶対的かつ定量的なバロメータが失われたという見解には同意できる。

一方で「貧しいと思う」「豊かだと思う」感覚自体が個人に委ねられているのではないかという見方もできるだろう。現に文中の彼女たちの淡々とした語り口には「貧しい」という自己認識があまり透けて見えない。それどころか、サウナでの休憩を想像して目を輝かせたり、そもそも見ず知らずのライターに朗々とこれまでの経歴を語り倒したり、出自に対する諦念はあっても現状の生活に対しては一定の充足を感じているのではないかとまで思える。

彼女たちの精神的な側面に目を向けたとき、特に気にかかるのは独我的思考だ。ギャルサーの構成員、酔っぱらいの客に対しては極度の拒絶を示したり、リナに至っては常連以外の客を覚えてなかったりする。リナ・マイカ間の関係性は別として（ここに絶対的な信頼関係があるかといえれば疑問は残るが）、彼女たちが抱える独りよがりのマインドはこれまで歩んできたプロセスから半ば強制的に醸成されてきた産物だ。これは文中の「世代・ジェンダー・就学歴・エスニシティ・出自の非対称性を背景としながら、相対的弱者が貧困のループに飲み込まれやすい状況が生まれている」という記述と符合する。

現代の「貧しさ」とはステータスの有無ではなく、思考の幅、そしてそこに至るまでの原体験を選択できるかできないか、という点に大きく依拠する。加えて述べるならば、「貧しい」ことを「貧しい」と思わない/思えない精神状態こそが「貧しさ」であり、逆説的に言えば、「豊か」なことを「豊か」だと思わない/思えない状態も「貧しさ」であろう。

複雑多様化した「貧しさ」には紋切り型の対案ではなく、ひとりひとりのキャリアやステータスを底上げすることは勿論、各々の「現在地点」に対する満足感を向上させる施策が重要になってくると思う。

ギャル二人の移動キャバクラによる生活は、一見豊かに見える日本社会の裏側を如実に現していることは確かです。家庭に事情があり、道はずれ現在の生活をするようになった二人は近代社会の犠牲者といってもいいかもしれません。まず疑問に思ったことは、彼女たちを救済する措置は日本社会に本当になかったのか、ということです。たまにテレビで特集されているように、道を外れた若者たちを更生させようと奮闘している人もいます。テレビで特集されるくらいですから、非行に走る若者の救済、更生措置を国レベルで置いていてもおかしくないのではないのでしょうか。置いていたとしたら、現実にこのような若者がいるのであるから、その制度は機能していないといえるでしょう。それでは、先進国として教育制度の拡充が次々に行われていく中で、その制度がなぜ機能していないのか、国は隠れた貧困問題をどう捉え、改善していこうとしているのか。そしてこの問題を指摘し世間に情報発信する記者の方々は、解決策を少しでも提案しようとしているのでしょうか。記者の役割はあくまでも隠蔽された現実を世間に訴える、そこまでののか、という疑問が湧きました。また、この文章では二人がこのような生活をせざるをえないのは、日本社会のせいだ、というニュアンスが非常に強いです。私は、一読者として、「確かに社会が彼女たちを置いていってしまったことは事実だ。しかし世の中の大半の人はなんとか苦勞しながらも家を持ち、生活していることもまた事実である。彼女たちの今までの私生活の大きな問題点はなんなのか。もちろん小さい頃から非行にはしったことであろうが、それから脱する機会は与えられなかったのか。第三者が責任を社会に押し付けてしまうことは簡単だ。ただ、当の彼女たち二人が自分たちの今に至るまでの生活をどうとらえているのか。抜け出す気はあるのかなのか、といったことを知りたい」と思いました。つまり、読者の中には「社会、社会って、本人たちにも大きな原因があるんでしょ。」と考える人もいると思うのです。ですから、本人たちではどうしようもなかった、社会のせいであるとしかいわざるをえない根拠をもっと読みたかったです。

旧来のいわゆる「ホームレス」とは全く異なった在り方をしている「ホームレスギャル」。ここで取り上げられた少女たち自身について語るとすれば、それは「彼女たちの勝手」ということで片が付いてしまうように思う。稼ぎ方はともかくとして、二人で週三万から五万の収入がある。決して多くはないが、二人で貯めて格安アパートを借りる資金くらいは捻出できたのでは。そして何より彼女たちは我慢するべきところを違えている。タバコとホストに使う金を抑えれば、おそらく空腹は満たされるし、我慢できないからとキャバクラを辞めなければ質素でも日銭に苦心することはなかったであろう。要は今この状況に彼女たちが身を置いているのは、彼女たちの選択であることを忘れてはならない。

しかし、問題はそこではない。生きていけるからと刹那的な生き方をする人間を拾い上げる術がないことである。上では散々に自業自得と言ってはいるが、やはり外部からの手助けなしに這い上がれというのは酷である。それこそルポに述べられた「個人化」の中では。

世間の谷間に落ちた人間は「なかったこと」にされつつある。従来のホームレスは確かに社会の中に存在している。だからこそ自立支援や炊き出しなどが(一応)整備、普及している。しかし目も向けられなくなったホームレスギャルには今なにもない。極めて黒に近い状況でも「自立して

いる、生きられる」からには放っておかれる。それが新種の貧困の一端であり、公式にも非公式にも手が差し伸べられないことが危険なのである。

移動キャバクラの二人は極端にしても、ワーキングプア、無縁のニート、生きていけないわけではないが、決して幸福でも認められているわけでもない存在はどうしたらいいのか。時代の急激な変化に日本は着いていけていない。名ばかりの政策や支援はあっても、それは「昔」の貧困をベースにしているに過ぎないと感じる。「最新」のケースに即座に対応していくことは難しいが、目を背けることは断じて正解ではない。具体的に彼らを引き上げる方法が的確に述べられないのがもどかしい。しかし、とにかく彼ら彼女らを孤立させないこと、これだけは絶対に必要である。それが難しい、或いは(意図的でなくとも)阻害されるのが今の「個人化」でありひいては「無縁社会」であるのだが。

ホームレスギャルたちがこうなっている原因として、生まれなどの境遇という面が大きいように思える。親との関係や育った地域・友人関係など、どれも「普通」に生きてきた私とはほど遠く、このような世界があったのかと疑うくらいである。しかし、彼女たちにとってはその生活こそが疑いようのない「普通」なのだ。ニュースで取り上げられるような「普通」の貧困者は(不十分かもしれないが)セーフティーネットがあったり、まだ私達の想像が及びやすいので改善策を考えることが(考えるくらいは)できる。

しかし、ホームレスギャルたちに対して私は「わからない」としか言えない。彼女たちはその生活が「普通」で、以前の生活よりも最善であると思っていて、コツコツ働いて安心できる家を買って安定した生活をしていくような私たちにとっての「普通」の生活をしたいとは考えていないように思えた。(もしかしたらそのような生活を知らないので望めないだけかもしれないが。)それなのに「働き口を作れば解決する」とか「風俗店の規制を緩和すれば解決する」と、私は言えない。そうは思えない。そのような自分が「普通」で彼女たちが「普通でない」というような、上から目線の解決策は何も意味をなさない。哀れんだり、申し訳ないと思うことも違う。彼女たちはこれから何を望むのか、記事には書いていなかった。記事の趣旨とは違うから聞かなかったのか、聞いたけれども答えがなかったから省いたのか、私にはわからない。しかし私は、その願いを聞いて叶えてあげることが解決策だとも思わないのだ。「叶えてあげる」ということ自体が同情からくる考えだからである。私には彼女達は今の生活に劣等感も侘しさも持っていないように見えた。私なんかよりももっと逞しく、強く生きているようにも思える。つまり「私が彼女たちにながができるか」ということから来る発想は彼女たちに失礼な気がするのだ。冷たいように思えるかもしれないが、ただ私の「普通」と一度距離をとってみたいのだ。私がこの記事を読んだ結論としては、「対等に彼女たちと飲んでみたい」。ただそれだけである。

この文章を読んだ感想を一言で表すとすれば、まさに今まで知らなかった世界を知ったという感覚だった。知らないというよりは、目を向けることすらしなかったというほうが的確かもしれない。繁華街に足を運べば、彼女らのような様相をした、いわゆるギャルは数多くいる。そんな彼女らを知らず知らずのうちに軽蔑的な視線で見つめていたわたしも社会を漂白する側の人間な

のだと感じた。よく言われるような「貧しい人」とはどこか違って、彼女たちは自分たちで見つけた職によって金を稼ぐことはしているが、その金をすぐに使いきってしまうということに驚いた。きっと、彼女たちはカネさえあればいくらでも遊びたいのだろう。また東京にはそうできる環境もある。

何が原因でこのような立場の、それも私たち大学生と同世代の女子が生まれてしまったのだろうか。彼女たちの元来のおいだちは、決して珍しいものではない。しかし、親の子育ての仕方であったり、家庭の環境だったりといった様々な要素が絡み合っ、彼女たちは道を踏み外してしまった。道を踏み外す、という表現も適切ではないのかもしれない。「親の暴力を受け続けていた子供」「お金がなくて援助交際へ走ってしまった中学生」と言われると、「そんな幼いうちから、かわいそう」と思う人が多いだろう。しかし、そこに薬物が絡み、キャバクラや風俗で働いていたとなると途端に「道を踏み外した、社会に不適合である少女」と呼ばれてしまう風潮が今の日本の社会にはあると思う。この日本の風潮が単に「貧困」とは呼べない貧しさを生み出したのだろう。

売春島についての文章を読んだ時にも感じた感覚だが、わたしにとって風俗や売春といった言葉はニュースの中の話、ドラマの中の話でしかなかった。それが、現実にあるということ、またそのようなことを生業とするしか道がない状況があること、それを排除する日本、という関係を目の当たりにし、大きな衝撃を感じずにはいられなかった。

「貧困」とは、なるべくしてなるものなのかと考えさせられた。記事にある少女たちのような「ホームレスギャル」は、本当に、「移動キャバクラ」を生活の手立てとして選ばざるをえなかったのか。社会的自立を目指す道はなかったのか、そもそも社会的自立という選択肢が彼女たちの頭の中に存在したのか、彼女たちにとって「貧しさ」「豊かさ」とはなんなのか。

「貧しさ」と「豊かさ」の狭間にある「現代の貧困」とあるが、現代の私たちの複雑な生活構造においてもはや「貧困」の定義があやしいものとなってくる。住む家がない、住所がないことは確かに「貧困」の一要素と言えるが、それ以外の点において「ホームレスギャル」たちを「貧困」だと感じる要素は見つかりにくい。その気になればお金は手に入るし、お金が持てればなんでも出来る(空腹を満たす、清潔な衣服を身につける)。もちろん、仕事を持ち、ある程度のお金を貯めれば、家を借りて自立することも不可能でないとは思っている。しかし、まだ若い彼女たちがそうしない(出来ない?)のはなぜだろうかと、強く疑問を持った。

彼女たちの場合は特に、その生い立ちが強く関与しているように思われる。一般的に言って恵まれない家庭環境で育った彼女たちは、まさに一般的なライフステージでの自らのあり方や、周囲の人々との人間関係の構築の術を知らず、生活の質的な「豊かさ」を感覚的に経験していないために「貧しさ」「貧困」から脱する強い力、意欲を持ち合わせていないのではなかろうか。

また、「貧困」から脱する過程をクリアすることが、現代社会において厳しいということも否めないと思う。「個人化」とあるが、現代社会では、極端な言い方をすれば誰も自分を助けてくれない社会である。自分で落ちた穴は、自分で這いあがらなければならない境遇に、私たちはある。そのとてつもない努力と困難を前に、現状維持を選ぶ貧しい人々がいることもまた事実だろう。

本当にこの世の中はモノで溢れて、とりあえず生活に必要なさまざまなことに関して便利になったが、モノだけでは埋められない私たちの何かを、現代社会はごっそり欠いてしまっているような気がした。

この「ホームレスギャル」を追った記録は「自由」とはいったい何者なのかということを考えさせる。彼女らは「移動キャバクラ」を「開業」し、どこの組織にも属さず、定住することなく、様々なところを自由に行き来する。しかしこの「自由」とは貧困で困窮しているがための「やむなしの自由」なのではないか。「自由」とは基本的に自己責任の論理である。稼ぐも稼がないも自由。どこに行こうが自由。しかし、教育機会や家庭環境に恵まれなかったりしてドロップアウトしてしまい、中間集団に頼るなどといった「インフォーマルなリスクヘッジ」もできにくくなっている社会の中で、そこで自由にやってみろと言われても、そんな自由は苦痛でしかない。このように、現代社会の一端を見るだけでも「自由」と「幸福」の一致がいかにも難しいかがよく分かる。

また「ホームレスギャル」の一面を垣間見ると、現代の「漂白」しようとする社会の流れは少し気味が悪いように感じる。この気味の悪さは何なのだろうか。彼女らの生活を見ると、いくら社会の中で「漂白」がされているといえどもそれは見えづらくなっただけであってその漂白されるものはちょっとよく見ればすぐそこにあるのだと分かる。この「漂白」しようとする流れは、本当は直視せねばならない問題にただ蓋をしてもっと根底にある問題を解決しようとする意志は放棄し、見ないようにしているだけである。貧困の連鎖から抜け出せない人が居るということ。「持たざるもの」にとってはあまりに風当たりの強い「自由」を強いられる現実があるということ。そして果てには「自由」と「幸福」の不一致というあまり希望が感じられないような現実が存在している。「ホームレスギャル」を見るだけでもこんなにも複雑で難解な問題が浮かび上がって確かに目をふさぎたくなる気持ちも分からなくはない。しかし、そういった問題を無視して「豊かさ」に酔っていたのではいつか社会は崩壊するであろう。

「ホームレスギャル」の生まれる背景には、家庭環境と現代社会の構造の関連性があるのだと思う。親の最終学歴と子供の大学進学率の関係が指摘されて久しい。現在の日本は一見すると生活水準も高く、誰もがそれなりの生活をできているように見えてしまうが、実際は何層ものレイヤーが積み重なっている状況だと思う。ブルーカラー系の職業についていたり、家で酒に溺れ暴力を繰り返したりするような親の元で過酷な幼少期・青年期を過ごした若者は、親の暮らしているレイヤーと同じ道をたどることしかできないのではないかと感じてしまった。ここで私の述べているレイヤーとは、単なる収入の差としてのレイヤーではなく、精神的・思想的な意味でのレイヤーである。現代人に限ったことではないが、子は親の言動の影響を大きく受けて成長する。自分で思考しているつもりでいても、その根本には親の思考が刷り込まれていると思う。人生において何を最も重視するかというような優先事項は、幼少期に親から教えてもらう考え方に特に大きく左右されるだろう。「ホームレスギャル」の二人は、このレイヤーが同じであるために共に行動できるのだと思う。また、二人とも現在のレイヤーを変えなくては、とは感じていないだろう。

う。もちろんそれは家庭環境によって作られるところの大きいレイヤーは変えるのが難しいことも要因ではあるが、現代社会の「豊かさ」によるところが大きい。そこそこの生活が出来、物質的豊かさに周りを固められているがゆえに、本当に必要とすべき精神面での豊かさに意識を向けることが出来ないのだと思う。彼女たちの生き方が間違っているとは決して思わないが、本当の精神的な豊かさは得られていないのだと思う。それは他のレイヤーを知らないからに他ならない。他のレイヤーでの豊かさを知らないからこそ、彼女たちは精神面での豊かさを重視していないし、求めてもない。目に見えぬレイヤーで区切られた、一見漂白の済んだ現代社会において、全ての人の精神的な豊かさが達成されることはあるのだろうかと感じてしまう。

繁華街に対する「浄化作戦」により、ホームレスや店舗型風俗店、街娼は急激に減少した。「目に付くような」、ある意味、闇とされる存在。清潔で機能的で豊かな日本とは、真反対に所属するものたちは社会から表面的に消し去られた。ネットを使えば誰しものが起業し、ビジネスできる世界で、リナとマイカは「移動キャバクラ」を開業している。彼女たちをそのまま見れば、ギャル。同時に、ホームレスでもある。自分たちで考え、生き抜くために移動キャバクラという方法をとったことは誰も知らない。「目に付くような」ホームレスではなく、社会から排除されるわけでもない。グレーゾーンに生きる彼女たちは、「豊かさ」に漂白された街を利用し、社会が作り出したセーフティーネットとは無縁の、彼女たちにとってのセーフティーネットを駆使して、明らかに存在している。それは深夜のマクドナルドであり、サウナであり、移動キャバクラであり、彼女たち自身でもある。

顔の見えない他人でさえも共通点が1つでもあれば、「友達」という「何か」になれる時代だ。わずかな接点だけで繋がれる社会は、リナとマイカを巡りあわせた。彼女たちは一見、社会から切り出された「豊かさ」とは真逆にあたる存在なのかもしれない。しかし、彼女たちは本当に、社会の「闇」の部分なのだろうか。隠したい存在なのだろうか――。

「浄化」された社会は、確かに美しいものだろう。そして、つくりあげられた美しさは虚構性と底知れぬ恐ろしさをはらんでいる。どちらが実で虚であるのか。この世界で生きる私たちの当たり前は、当たり前すぎて気がつかない。「持つ者」と「持たざる者」、「豊かさ」と「貧困」、その定義自体が一つの方向から見たものでしかないのだ。つまり「中心」と決め付けたものから「周縁」と決め付けたものを見ているにすぎない。

浄化された社会こそ、「虚」であるとするならば、リナとマイカこそ「実」なのではないか。そうとは言い切れない部分がある。彼女たちはあまりにグレーゾーンであり、彼女たちこそ「実」である社会が生み出してしまった「虚」であるからだ。しかし、この矛盾した社会で彼女たちは今も生きている。もし、この世界が闇でしかないのなら、リナとマイカは闇の中でかすかに輝きを放つ光なのかもしれない。

まずホームレスギャルを取り上げるというところに面白さを感じました。文中でも述べられている通り、今まで自分が知らなかったし、おそらく多くの人も知らない世界の人々だろうと思います。またマクドナルドやネットカフェといった身近なところに存在しているということも意外で

した。身近に貧困が存在していながら気づかないのは「漂白」されているのかとも思いますし、現代の貧困の「より複雑な様相」を表しているのかとも思います。さらにホームレスギャルの描写の細かさや、その分析の鋭さも驚きました。描写の細かさから、既存の生活形態やセーフティーネットからこぼれ落ちていく過程や、可視化できない貧困が確かに存在しているというリアリティーが伝わってきます。今までにない貧困であると同時に、今までにない状況で人々が踏みとどまっていること。またそれは逆説的には現代だからこそ生き残れる形であるということが読み取れました。「中間集団の崩壊」と「個人化」の一端は（中略）社会的包摂からこぼれた領域に生きる人々にもはっきりと見られる大きな動きであるということは意外でした。ご指摘の通り、良い点だけを強調しすぎているのかとも思います。個人化の傾向は現代日本社会の進んできた道だと思いますが、今後はその方向をもう一度考え直さなくてはいけないかもしれないという感想を抱きました。一方で疑問に思ったのは、こうした人々がどれくらいいるのかということです。文中では「最近の女性や若者の間で広まってきている現象というわけではない。」とありますが、ではどれくらいいるのでしょうか。広く言えば「インフォーマルなリスクヘッジ」の手段に頼ることすらできない状況」になっている人の数ということですが、そうではなくてもホームレスギャルが彼女たち以外にどれくらいいるのかということが書いていないのは気になりました。そうした全体像があれば、より説得力があり、社会への危機感が増していたのではないかと感じました。

記事では、マックなどの24時間営業の店を渡り歩きながら移動キャバクラという独自の仕事で食いつないでいる20代のホームレスギャルが紹介されている。

彼女たちが従来の水商売や店舗型風俗店に頼ることができなくなった理由について筆者は以下のように述べている。「一方には、それが「普通のバイトに毛が生えた程度しか稼げない」という「デフレ化」（と、それを支える経済成長の柱となる構造の行き詰まり、グローバル化など）があり、他方には、夜間営業取り締まりの厳格化や新規店舗型風俗出店の困難化に象徴される規制強化や「浄化作戦」による、「駆け込み寺」としての中間集団（公と個人をつなぐ集団）への締め付けおよび解体という「個人化」がある。」ホームレスギャルの移動キャバクラという選択は、分かりやすい絵に描いたような貧困があってはならぬものとして隠された社会ではこれまで用意されてきたインフォーマルなリスクヘッジに頼ることができないということを端的に表しているという。

本当にホームレスギャルたちは従来のリスクヘッジに頼ることができなくなった結果、移動キャバクラを開業したのだろうか。彼女たちは、以前は水商売や店舗型風俗店に勤務していた。そこを辞めた理由は客とのトラブルなどが原因で、またやろうと思えばインフォーマルなリスクヘッジに頼ることができるだろう。しかし、それをしないのは、自ら客を選びたいとか、店舗の規則に従うのが面倒などといった彼女たちの気分というか性格が主であり、「浄化作戦」によるものではないと感じた。ここで取り上げられている彼女たちは珍しい例だろう。しかし、このことを滅多にない別世界の話で終わらせてしまうと、彼女たちは不可視な存在のままである。段ボールの家を河川敷に作っている汚いおじさんだけがホームレスではないことは事実なのだ。まず

は、一見そうは見えない若い身なりもそこそこなホームレスの女性という不可視な存在を認識することが必要だと感じた。そして、ゆくゆくは彼女たちを取り巻く環境について理解していけたらと思う。

私は、ホームレスギャルという命名法に着目したい。そもそも、「ギャル」というカテゴリーが一昔前に流行り始めた時、メディアにクローズアップされた彼女たちの姿は「ガングロ」「ヤマンバ」などといったあまり上品ではない言葉で形容されたように思う。私自身正直に言って彼女らを好ましく思ったことは一度もないし、「大和撫子」を模範的な女性像として規定していた日本社会も彼女たちを「サブカルチャー」に包摂することでその存在を妥協していたのかもしれない。しかし「ギャル」はオヤジ文化に対するカウンターカルチャーという側面を確かに持っていたのであって、その意味で彼女たちの意気軒昂さ、反抗心はその焼きすぎとも見える「肌黒」ややや過剰な色彩の「染髪」にあった(ただ最近では白ギャルというのもいるので一概には言えないかもしれないが)。しかし、本記事における「ホームレスギャル」は、肌は荒れ髪はくすんで「キタナイ」印象を受けるようなものである。それは彼女たちの「主張」よりも「苦境」を表していて、その肌の黒さや茶髪は本来の意味での「汚らしさ」が前景に押し出されているように見える。そして彼女たちのライフストーリーも物悲しい。選ぶことの出来ない「環境」によって選択肢を奪われ、追いやられるようにして東京に来て、セックスアピールで糊口をしのぐ。そのような生き方にはもはや自由奔放で反権威的な「従来的なギャル」の姿は見受けられず、ただ彼女たちは日々を生きるのに必死な女性としか見えない。しかし、彼女たちはその格好において「ギャル」っぽいことも事実であり、私は恐らく彼女たちと普通の「ギャル」を見分けることは出来ないだろう。彼女たちは「ギャル」という表象に組み込まれ、このような記事がなければ往来を歩く誰にもその貧困を気付かれることなく、ただ眉を顰められるだけだろう。「闇の中の社会学」というテーマ通り、彼女たちが普通の「ギャル」像とはかけはなれた生活をしていることを炙り出している点は、非常に興味深かった。

本文を読んで一番に疑問に感じたことがある。それは、なぜ二人の少女はある程度のお金を手にすることができるのにアパートなどに住んで生活しないのかということだった。読みながら自分なりに考えてみた。本文にもあったように現在の社会では簡単に「食」や「住」にありつける。実際に大学生になってから夜の街にいる機会が増え、家以外に夜を明かすことができる場所が多く存在することを知った。ネットカフェ自遊空間のキャッチコピーには「すべてのお客様の時間消費型ニーズをみたく。」と書いてある。時間消費は現代人のニーズとなり、そのニーズを満たす環境が簡単に提供されるようになったのである。つまりはその場限りの時間を細切れで提供する中途半端な豊かさが街に散在するようになったのだ。一時的な休息を求めてそのような施設を利用し、少しばかりのお金を得て食いつないでいく。このような生活をする事ができるようになり、その環境から這い上がるよりも先に目の前の「食」と「住」に手を伸ばすことができるようになってしまった。中途半端な豊かさが少女たちを真の豊かさから遠ざけているのではないかとというのがわたしが出した結論である。

また、「職業のフリーランス化」ということが本文に書かれていたが、個人化する職業の厳しさを身近に感じた経験がある。私はコンピュータで算数の教材を作成する会社でアルバイトをしている。その教材のリリース前に来ていたエンジニアの方が次のような話をしてくれた。「私の場合、個人でやっているから一つの仕事でミスがあったらその賠償もすべて自分で負わなくてはならない。毎日がリスクと隣り合わせ。企業に入った方がいいですよ。」本文中の、「従来であれば中間集団が吸収していたものも含めて、状況の変化の中で生まれるリスクに生身の人間がさらされることも意味する。」という言葉を読んで、このエンジニアの人の話を思いだした。彼は徹夜続きで、その日も16時の時点でまだ昼食を摂っていなかった。集団の崩壊の影響を受けている個人は、思った以上に私たちの身近にいるのだと感じた瞬間だった。大学生の生活からは想像できない日常が街のあちこちで繰り返されている。

売春・水商売・性風俗は確かに世間一般の倫理と反しており、淘汰されるべきだ。だが、目に見える店舗型風俗を片端から摘発するだけのやり方は果たして理にかなっているのだろうか。世間的には「あってはならない」とされているのに性風俗に対する需要・供給は両方いつの時代にも消えることはない。「売春島」の記事にも似た記述があったが、その矛盾こそが性風俗を「公然のタブー」として人目につかないところに押しやり、ひそかに生き延びさせようとしている。今のままの警察のやり方では、性風俗を駆逐するのではなく逆に隠蔽し生きながらえさせているのだ。

性風俗を取り巻く問題に対して我々がすべきなのは、個々の事例を拾っていくことだ。ここでは年端もいかない少女が自らを守る手段として移動キャバクラを選んださまが語られる。そこにはやはり、実の親に求められていないという寂しさがあった。言うなれば「愛情の貧困」に陥っていた。幼いころから実の親に否定されることの圧倒的な悪影響にはいつも愕然とさせられる。いま彼女らは子どもの頃満たされなかった愛情を互いに協力して生活することで補完しようとしているのだろう。移動キャバクラという見慣れない文字列に反して、彼女らは特殊な人間ではない。人並みの愛情に恵まれなかった子どもがいかにか「つながり」に飢えているのかを如実に示してくれる存在だ。ここで、いつもどうしても湧いてしまう疑問がある。「親は、愛せないなら生まないほうが彼女らのためだったのではないか」。しかし、彼女らはすでに生きて、生身の人間として存在している。そんな疑問を持つには遅すぎるし、恐ろしいタブーであるような気さえする。であるなら愛情をやれない親に代わって、我々が彼女らを見守る責務があるのだ。「愛情の貧困」は枝分かれして様々な社会問題につながっていく。今回はたまたま移動キャバクラに行きついた、ただそれだけだ。「愛情の貧困」時代にあって、もはや我々は誰一人無関係を装ってはいけないのだ。

この「ホームレスギャル」に関する記事は、「中年男性」のイメージと共に報道されがちな現代の「貧困」の隠された多様性を示すものだった。貧困においても個人化がすすみ、「まっとうな」社会生活からドロップアウトした人々が、水商売や力仕事などの筆者の言う「インフォーマルなリスクヘッジ」からも離れていく現代の様相、その実像としての「ホームレスギャル」を筆者は

描いている。彼女たちは組織から離れた形での水商売で生計を立て、日々の寝床と食事は数百円で獲得する。その姿は確かに、我々の目に届かない、しかし確かに存在する、ノマド化し既存の組織にも頼れなくなって、それでもなお生き抜くという「現代の貧困」を象徴している。一方で、「個人化」した現代の貧困には別の姿あるのではないかという疑問が湧く。頻繁に報道される日本国内の餓死者の多くは、しっかりとした住居を持ち、それでいて収入源をみつけられず、だれにも頼れないまま亡くなっていく。「ホームレスギャル」たちは住居こそなかったものの、薄くともそれなりの人間関係を築き、助け合いながら生活できていた。一方でこの餓死者たちは、親戚にも友人にも近所の住人にも、さらには生活保護などのセーフティネットにさえみつけてもらえないまま、1人で貧困と闘っている。彼らは住居こそあるものの、一切の人間関係を喪失しているのである。これもまた、筆者の描いた現代の特徴である「個人化」、そのひとつのパターンといえるのではないだろうか。確かに、このような餓死者については耳にすることも多く、ほとんど報道されることのない「ホームレスギャル」の姿を描くことに筆者が注力するのも理解できる。しかし、「個人化の進む現代の貧困を描く」ということを念頭に置くと、(連載の前後でフォローされているのかもしれないが)他の「個人化」のパターンも含まれていてよかったように思う。筆者が描きたいのは「ホームレスギャル」なのか「現代の貧困」なのかが問われるところだ。

「必ず2人じゃないとホテルに行かない」「ターゲットは華奢な体格をした、酔っ払っているサラリーマン」彼女たちが経験と防衛本能で作上げた営業方針。年端もいかない少女たちが語る、身を守るために・生きるために決めたルールやその働き方を読んでいると、その言葉の裏にこれまでの彼女たちの人生における苦労や後悔がにじみ出ていると感じた。

しかし、一方で彼女たちは本当に貧困と呼べるのだろうかとも感じた。確かに家はなく、収入も不安定である。そのような彼女たちを記事では、目に見えない「現代の貧困」「先進国型の貧困」と呼んでいるが、本当にこれが「現代の貧困」なのだろうか。記事によると、彼女たちは水商売や店舗型風俗など旧来の「インフォーマルなリスクヘッジ」の手段にもはや頼ることができない状況であるとされているが、私にはそうは思えない。私には、彼女たちが「移動キャバクラ」を営んでいるのは「インフォーマルなリスクヘッジ」に頼ることができないからではなく、頼らないことを選択したからであると思われるのだ。

というのも、現代でも寮などが完備された風俗店は多くあると聞く。風俗店に限らず、頼ろうと思えば頼れる先はいくらでもあろう。彼女たちがそうしないのは「若さ」と「女性」という武器を商売道具に、「移動キャバクラ」を営んだ方が彼女たちにとって都合がいいからだとは私は考える。「2人ともすっげー金遣い荒いから、すぐなくなっちゃう。ホストクラブ行ったり、服買ったり、あとマッサージとか」というリナの言葉からも読み取れるように、店舗で働くよりもお金が稼げるから、もしくは店の経営者側との面倒なやり取りを省く必要がなく気楽だから、というのが実際彼女たちがこういった生き方をしている理由なのではないだろうか。

「貧困」に現代も過去も関係ない、と私は思う。貧しいということは今も昔も変わらず、様々な理由から生きていくための手段がなく、生きるためには他者に頼らざるを得ない状況を言うのではないだろうか。現代でもそういった人々は多く存在する。もしその「貧困」に数十年前と現

代で違いがあるのだとすれば、それは「貧困」自体の変化ではなく、それに対峙する我々の変化だろう。

私は海外旅行が趣味で発展途上国にも何度か訪れたことがあるが、そこで感じたのは「貧困」に身を置く人々の目が、日本やヨーロッパのそれとは違うということだ。彼らは道行く人々に対し必至で懇願していたし、人々も、自分たちも決して裕福でなくともそれにこたえていた。しかし日本をはじめとした先進国では、確かに存在する「貧困」を見えないふりをして無視し、「貧困」に身を置く人々も道行く人に懇願することを忘れていた。真の「先進国型の貧困」とは、こうした頼られるべき人々が頼ってくる人々を無視し続けたことによって生じてしまった、「頼ることを忘れてしまった貧困」なのではないだろうか。

私にとって、一生懸命に働きお金を稼いで生活を支えてくれている父がいること、私の帰りがどんなに遅くとも毎日ごはんを作って待っていてくれる母がいることは当たり前のことだった。兄妹や友達にも恵まれ生活に不自由することのなかった二十年間。もちろんこれらのことに感謝していないわけではない。心から感謝をしているし、その気持ちを度々態度や行動で示してきたつもりである。しかし恵まれすぎた環境の中で生きてきた私には、感謝の気持ちが足りていなかった。——ホームレスギャルの記事を読んで純粋に感じたことである。

恵まれれば恵まれるほど、日本社会が隠している「日本社会の本当の姿」に目を向けることができなくなっていく。それが余計に散乱する社会問題を解決が遠ざけているのではないだろうか。私の友達には少なくとも住処を持っていない子はいない。早々に結婚して子供を産んだような子は何人かいるけれど、皆自分の力で稼いでどうにか生活を切り盛りしている。確かなことは、私とホームレスギャルが生きているのは確かに同じ社会であるはずなのに、何か大きな隔絶があるということだ。

今、満たされた環境の中で何気ない日々を送っているときでも、同じ地球の中で住処を持つことすらできず、裏の世界に手を伸ばしながら、どうにか生きるための綱を掴もうとしている人々がいる。社会によって隠されているだけであって、同じ世代であっても女性であってもそのような人々は存在する。問題を隠すことによって社会は確かに美化され、いわゆる「理想」と呼ばれる社会はある程度完成させることができるのかもしれない。しかしやがて真実の姿が暴かれる時が来ってしまうかもしれないのだ…。その時、人々が追い求めてきた「理想」は脆くも崩れ去ってしまうのではないだろうか。

池袋は早稲田大学から歩いていくことのできる距離にある近い町だ。しかし今日もそこで路頭に迷うホームレスギャルの存在は私にとって、また当たり前のように何気ない日常をこなす多くの人々にとって非常に遠いものである。近くて遠い町、池袋。そこに内在する問題をまず知ることが、問題解決への確かな一歩になるだろう。知ることなしには何も始めることができないからだ。

まず、簡単に要約する。世の中には「おかしなこと」があふれている。この連載は普段気づかない「おかしなこと」に注目し、現代社会をより正確に捉えようとする。今回は、20代のホームレスギャル2人が「移動キャバクラ」をしながら生活する実態を描く。

「移動キャバクラ」という種類のキャバクラは、ここ以外ないだろう。繁華街で客を捕まえ、どこかの居酒屋で酒の席に付き合う。その対価にいくらか貰う。このような形態で営まれている。また、ごくまれに援助交際に繋がる。一回の営業で、5000円～1万円ほど稼ぐが、そのお金はすぐに使う。彼女たちは、その日暮らしを抜け出せない。

彼女らは厳しい環境で育った。一方は暴力と薬にまみれ、もう一方は性と金に執着した。昔からの付き合いではなかった。お互い地元にいられなくなり上京し、知り合った。知り合った場所もどちらから言うと日の目を見ない場所だった。

現代社会は、かつての可視化された貧困でなく、目に見えない貧困が蔓延っている。都市部では少ないお金で、衣・食・住を手に入れられる。その日暮らししかできないのに、貧しいとは見えない。それが都市部での新しい貧困である。彼女たちも一見すると普通のギャルだ。

コメントを加えていく。まず全体の構成に不備はない。20代のホームレスギャルと移動キャバクラの概要。彼女たちの過去。そして現代の貧困と絡めてまとめる。読みやすいし取つきやすい構成である。しかし、一点あげるとすれば、浄化作戦などの歴史は冒頭に合ってもよかった。

次にもう少し細かい点について。もし何か加えるとすれば、彼女たちが漂白されている点だろう。最後のまとめで、目に見えない貧困、漂白された貧困について触れている。ここの具体例として、彼女らの話しがあるとより分かりやすいだろう。

また個人的には、彼女たちが今後をどのように考えているのか、彼女たち自身の言葉で聞きたかった。希望があれば、その希望と社会政策のかい離などにも触れることができただろう。

筆者はここで「現代の貧困」を、90年代後半以降における、猥雑なモノを表面的に消し去る「浄化作戦」が行われてきた日本の中で、それでも「漂白」されずに尚残り続ける可視的な「貧しさ」と、達成され続ける「豊かさ」との狭間に生まれる「不可視な存在」である、と位置付ける。しかし後半で最終的に、ここ10年の日本が直面しているそうした「現代の貧困」は、カネやモノが満たされない「途上国型の貧困」とは異なる、いわば「先進国型の貧困」であると捉えられている。筆者は「先進国型の貧困」の特徴として、カネやモノはそれなりに行き渡っており、少なくとも「食」や「住」は街に遍在しているにも関わらず、同時にヒトや情報も過剰になっているが故に、個々の労働力、土地に付される「値段」の格差が目立ってしまうこと、それにより、「持つ者」／「持たざる者」の溝が極めて鮮明になってしまうこと、つまり、世代、ジェンダー、就学歴、エスニシティ、出自などの差異を背景として、相対的弱者が貧困のループに巻き込まれやすい状況が生まれていることを挙げている。ここにおいては必然的に、「現代の貧困」＝「不可視な存在」＝「先進国型の貧困」という関係が成立していることになるが、果たしてこれが的を射ているかと言えば、多少の議論の余地があると思われる。筆者が定義付ける「不可視な存在」というのは、ルポで登場するリナとマイカのように、我々が「貧しさ」と聞いて想像するような形態(ホームレス、ネットカフェ難民など)、いわゆる可視的な「貧しさ」とは異なる形態である。つまりそれらが示唆するのは、我々の生きる、表面的に「貧しさ」を「浄化」した「豊かな」社会には、それでも尚残ってしまう分かりやすい「貧しさ」があるが、実はそれらは極めて部分的なものでしかなく、「豊かさ」と可視的な「貧しさ」の狭間にある「現代の貧困」＝「不可視な

存在」に目を向けることで、現代社会の構造的な本質が見えてくるということであるだろう。しかし、そうした「現代の貧困」＝「先進国型の貧困」の原因を、「持つ者」／「持たざる者」という相対的弱者という観点で片づけてしまうと、可視的な「貧しさ」と「現代の貧困」との差異が不明瞭になるのではないかと思われる。私見によれば、筆者が掲げるように、世代、ジェンダー、就学歴、エスニシティ、出自などの差異によって相対的に弱者が貧困のループに巻き込まれるのは、何も「現代の貧困」に限定され得ることでは無いように思われる。可視的な「貧しさ」を体現してきた者も、上記の事柄などにおける差異によって相対的に「貧しく」なってしまうはずであるからだ。その為、筆者が掲げる「先進国型の貧困」は現代社会に特徴的な事柄とは言い難いと思われるので、可視的な「貧しさ」と、リナとマイカが体現するような「現代の貧困」との差異を今一度検討すべきであると考えます。

貧困のあり方は時代や産業の変化と連動している。かつての貧困のイメージ、つまりホームレス⇨中年男性という枠組みでは、現代社会の貧困を完全に捉えることはできない。かつてのホームレスのイメージは、男性のみが夜の公園や橋の下でも比較的安全に暮らしていけるという前提に依ったものである。女性はいつでも性犯罪の危険と隣り合わせである。社会のシステム上、女性がホームレスになることは不可能であった。しかし、24時間休み無く、営業をするファミレスやファストフードチェーンの台頭は貧困の様相を変えた。低価格で身の安全を確保することができるこれらの環境は、新たな社会構成員をホームレスに成らしめることを可能にした。また、これらの新たなギャルホームレスの問題は、構造的に問題の存在を見えにくくしているというところにあるだろう。一見ただけでは、マクドナルドで暖をとるホームレスギャルと「一般人」を見分けることができない。筆者は、このような問題わかりにくさを受け止め、明るみに出すことの大切さを説いている。この点において、一方では私は同意する。問題を暴露し、市民間のディスカッションは問題解決の一助となることもあるだろう。しかし、わたしたち市民（特にファストフードの経営者や従業員を含む）が問題の存在に気づいたとしても、現在の公園に住居を構えるようなホームレスと同様、有効な援助をできないとしたら、彼女たちはどうになってしまうのだろう。おそらく、世間の冷ややかな目線はより一層一般化され、厳しいものになるかもしれない。彼女たちの身の拠り所としているマクドナルドから追い出されてしまうかもしれない。彼女たちはそれを望むだろうか。メディアの注目により、摘発が行われ、生活がより苦痛になるかもしれない。問題の暴露だけでは、本質の解決にはつながらないことを私たちは了解しなければならない。問題を明るみに出すことで、このような周辺の問題をもたらししているコアの部分の分析し、解決することが大切である。(830字)

日本が豊かな国であることは間違いない。その一方で、その中に「貧困」が存在することもまたまぎれもない事実である。しかしながら、私たちはその貧困に対して目を向けようとはしなかったり、仮に目を向けたとしてもどこか偏った目で判断しがちである。本文をなぞるようだが、この点は非常に重要であり、また興味深い。

「ホームレス」という言葉を聞けば、路上や公園のブルーシートの中で生活し、決して清潔とは

言えない身なりの人々を想像するだろう。確かに間違いではないが、それはホームレスのうちの一部のホームレスに過ぎず、本文の中で描かれた彼女たちもホームレスであれば、世界中を飛び回っているため、決まった家を持たず、常にホテル暮らしをしている人も厳密に言えばあるいはホームレスなのかもしれない。しかし、メディアが報じ、世間に認知されるのはある一つの側面だけで、受け手である私たちもそれをあたかもそのことの全てとして受け取ってしまう。情報が溢れかえる現代社会で情報の取捨選択、正誤の判断をすることは確かに難しい。しかしながら、少量の、または偏った情報だけで物事を見定めた気にはなってはならないように思う。「ホームレス」と一口に言っても、様々な人間がいて、私たちとは異なる生活をしているかもしれないが、例えば、本文のようにリナとマイカ、彼女たち 2 人の今を見つめ、いかにして彼女たちが生きているのか、その姿を知るだけでも新たな視点、考えが生まれるかもしれない。

本文で描かれる彼女たちの日常は私たちのそれとは大きく異なる。家を持たず、マクドナルドで夜を明かしたり、カプセルホテルで足を伸ばして寝ることが何よりの贅沢だったり、到底想像しづらい生活だ。しかし、こうした生活に行き着いたのにはわけがあり、彼女たちが自ら選んだ貧困ではない。経済力があるに越したことはないし、裕福とは言わずとも生活に苦勞しない生活があれば彼女たちはそちらを選ぶだろう。だが、現実を見れば彼女たちの財布の中身は数百円ずつしかなく、その日暮しがやっとの状況。しかし、彼女たちはそんな状況下でもしっかりと生きようとしている。「移動キャバクラ」という彼女たちなりの方法でお金を稼ぎ出し、24 時間営業のファストフード店で食事を済ませる。世間からは冷たい目で見られるかもしれないが、一つのビジネス、あるいは生活スタイルとして十分に成り立っているという見方もできると思うし、考えさせられる部分があった。

そういった意味からも、著者の視点は非常に中立であり、豊かさの中の貧しさをまさにその中に生きる人間を通して描いているように思う。

僕はこの記事を読むまで、駅前で暮らすようなホームレスの人々は男性の割合が多いことなどから、女性のほうが性産業や男性と比較したときの生活保護の受給のしやすさなどといったセーフティネットが充実していると考えていたため、多くはないにしろこのような暮らしをする若い女性がいることには驚いた。

しかも彼女たちは風俗業、水商売など職や拠り所の無いの無い若い女性にとってのセーフティネットともいえる産業を一度は経験しているにも関わらずあえてそれらから離れて自らの選択で今の暮らしを暮しているというのがさらに不思議に思えた。

しかし記事の中にもあるように現在の日本では、まるで臭いものにはふたをしろと言わんばかりに一般的に社会の暗部とされる風俗産業への規制が行われ、その反面で学業や本職の副業として風俗業界で働く女性や外国からの出稼ぎとして風俗で働く女性などが増え需要と供給のバランスが以前とは異なってきていること等を考えると、風俗産業そのものが以前のようにセーフティネットとしての役割を果たさなくなっているようにも考えられる。

また、記事中で彼女らが不可視な存在であると述べられているが、これもまた規制や開発によって造られた表面だけの豊かさによる弊害だと感じた。

現代では都市の発展やファッション・フードのインスタント化でほんの少しのお金で人間が生きていくのに不可欠な衣・食・住のすべてを揃えることができるため、一見ただけでは彼女らがホームレスであると見抜くことができない。そうなる彼女ら自身が助けを求めない限りは年齢とともに限界を迎えるようなその日暮らしを続けていくことになる。今は彼女らもそのような暮らしで良いと感じているかもしれないがこの先、更なる開発や規制が行われ、都市が清潔で機能的になるにつれ彼女らのような暮らしをする人々はますます増えていくのではないかと感じる。もしそうなった時、本当に必要なことは社会の暗部に対する規制や開発ではなく新たなセーフティネットの整備であると感じた。

著者が述べるように、リナとマイカの生き方からは現代の貧困の実態がうかがえる。それは、外見では判断の出来ない、また極端にカネやモノに飢えているわけでもない貧困である。また彼女達の「移動キャバクラ」という営業形態は、組織や集団に所属しないという個人化の傾向が、貧困層にも見られるという新たな気づきを与えてくれる。

このような貧困では社会復帰がさほど難しいようには思えないのは、私の思慮が浅いのだろうか。しかし彼女達の場合は、少しばかり支出を我慢すれば、すぐに住居を持った生活が可能であるように思えるのだ。また必要なコミュニケーション能力は既に持ち合わせており、住居を持つ以上の社会復帰も望めると思われる。本人は「金遣いが荒い」と述べているが、彼女達はあえて貧しくあり続けているのではないだろうか。そうだとしたら、その理由はいったい何なのか。

私達のように一定水準以上の社会生活を送っている者は、守られて育ってきた。守ってくれるのは第一に家庭、第二に教育が挙げられるだろう。私達は守られて育ってきたから、「あつてはならぬもの」を極力知らないままで済んでいる。しかし、彼女達は守ってもらえなかった。リナは父親の暴力や薬物、マイカは援助交際、というバックグラウンドを持っている。彼女達は守ってもらった経験がないために、守る、守ってもらう、という考えがそもそも最初から無いのかもしれない。それが、組織(ここでは店舗型風俗)に染まらなかったことや、定住しないということに表れているのではないだろうか。

かつてから「あつてはならぬもの」として、水商売や風俗業は社会からはみ出た者のためのリスクヘッジ方法であるが、何が原因でそこに行きつき、また何が原因でその世界から抜け出せなくなるのだろうか。社会からはみ出た者がみな水商売をするわけではないのだ。そのことを考える時、現代における家庭や教育の問題もまた検討していく必要があるだろう。

この記事は現代の「フリーランス化」のもう一つの側面を映し出す秀逸な記事であると思う。記事の中でも述べられているように、今日では優秀な人が組織の枠を超えて活躍できるという意味で「フリーランス化」が喧伝されている。それは会社組織が労働者を包摂できなくなった、あるいは経済コストの観点から包摂しなくなったことと表裏一体である。自発的にフリーランス的な働き方を選んでいるように見えて、実はそれしか選択肢が無くなりつつあるという構造がそこには存在するのである。それによって個人の能力が高く評価されるようになり恩恵を受ける人もいる一方で、社会から包摂されなくなってしまった人も多くいる。ここまではよくある議論であ

るが、この記事が新鮮なのは、それが一般には議論の対象にはなりにくい水商売の世界でも起きているという指摘である。加えてこの記事のもう一つの良さは、リナとマイカという逞しく生きる個人を描くと同時に、社会構造の問題の両方が伝わるようになっている点にある。水商売の世界であるとはいえ、彼女たちの生き方は「ノマド」そのものである。彼女たちは劣悪な家庭環境から逃れ、旧来の水商売の世界では相手にされない中で、どうやったら稼げるのかということを目指すから考え、実践している。他方で彼女たちは絶えずリスクにさらされており、いつ破綻するか分からない。また、彼女たちは個人の逞しさと運によって現状では偶然にも上手くやっているが、こうしたライフスタイルはやはり個人の能力に依存する特殊なものであり、社会問題の解決策という意味では普遍的な議論に発展させるのは難しい。この記事に対しては、取材の対象が特殊すぎるのではないかと批判する人が現れることが予測されるが、これまで注目されなかったマイノリティに焦点を当てたというだけで十分価値のある記事であり、そこに例えば普通に働くキャバクラ嬢のようなマジョリティとの比較を求めたりするのは要求過多であり、お門違いな批判であろう。

石井光太の『世界「比較貧困学」入門』によれば、先進国である日本では、相対的な貧困が生まれる。このリナとマイカもまた、例に漏れず、相対的貧困の立場にいる。生まれた社会階層や家庭環境などの要因により、不安定な生き方を選ばざるを得なかったのかも知れないが、キャバ嬢という彼女らの生き方は実に浅薄で愚かであるようにも思える。しかしながら、フリーランスで、つまり実力でもって、図太くたくましく生きるというそのアグレッシブな姿勢は、見習うべきでもあると感じる。人目を憚り生活保護を受けない老人、就職活動の失敗で、すぐに命を絶つ若者など、あまりにも世間体を気にしすぎるあまり、生きることを放棄する人間が日本では多いらしい。そんな中で、このリナとマイカの、ある意味凶々しい生き方には、驚嘆せざるを得ない。途上国に見られるような絶対的な貧困が無いこの国においては、恥さえ捨てれば、どんな汚い生き方をしてでも生きていくことができる。相対的な貧困層に位置するはずの彼女らの人生観や価値観は、本来もっと鬱屈していてもいいはずなのだ。他者の目を気にしたり、格差の中で絶望したり、もっともっと自虐的になるはずなのに、そうはなっていない。果たしてこれはなぜか。彼女らがまだ若いというのも大きな要因だろうが、彼女らはある種の職人的な世界に生きているからではないか。その日暮らしのギリギリの境界線の上で、男をいかにもてなし、いかに歓待するか、こうした職人芸を極めるような瀬戸際の戦いを彼女らは日々繰り返している。彼女らの毎日は、きっと本能的な興奮だけでなく、知的な興奮にもあふれているだろう。世間のサラリーマンよりもよほど創意工夫が必要なチャレンジングな仕事をしている彼女らの現在のQOLはきっと高い水準にあるに違いない。彼女らを見習い、日本人はもっと、ギリギリの戦いに身を投げ打ってもいいのではないか。年を重ね、女性としての特権が使えなくなったとき、彼女達の生活は崩壊するかも知れないが、今を生きる情熱を感じさせる彼女達の生き様から得るものは多いのかも知れない。

この文章は著者自身が池袋で出会った”ホームレス少女”たちについて書かれており、このよう

な少女たちが特殊な事例ではないとある。それならば池袋以外にも彼女らのような少女たちが存在することになる。ここで疑問に思ったことは、リナとマイカが移動キャバクラを始めた当初、住みづらくて逃げてきたという、歌舞伎町、新宿に住むホームレス少女たちはどのようにして生きているのだろうか。本文にもあるようにどこかへ上納金を払っているのだろうか。それとも歌舞伎町にはホームレス少女は存在しないのだろうか。池袋だけでなく、渋谷や新宿といった主要なポイントでも同じような調査をすれば、より”ホームレス少女”たちの実態に迫れるのではないだろうか。また、彼女たちを外から見る存在=客引き、警察官、彼女たちの客の視点から眺めれば、より彼女たちの実像実態が鮮明になるのではないだろうか。

本書の71ページに、『「合法と違法の境目にあるような職業」全体が「デフレ化」のなかにある』という記述があり、その要因にグローバル化が挙げられているが、なぜグローバル化がそういう職のデフレ化に繋がるのか疑問に思った。グローバル化によって何が引き起こされ、それがグレーな職業に対してどのような影響を与えたのか、簡単な説明があるといいのではないか。また、インフォーマルなセーフティネットが機能していないのは女性に対するものだけなのか、男性に対するそれはどのような状況にあるのだろうか。そのあたりについての説明も少しあるといいのではないだろうか。

最近ではこのような「見えにくい貧困」のなかで暮らしている人びとを取り上げる機会が増えているが、それに対して政府のような公的な機関はどのように対処しているのか気になった。何らかの対処がなされているはずだが、それをリナやマイカのような少女たちは自分たちにプラスになるものとしてとらえているのだろうか。彼女たちのその後がとても気になる。

私が今回のホームレスギャルの記事をよんで感じたことは貧困の連鎖である。

2008年リーマン・ショックが起これ世界中に不況の波が押し寄せた。日本においても世界的な景気の落ち込みから経済は落ち込み、派遣切りやリストラという言葉が連日メディアによって報道された。その頃に「ネットカフェ難民」という言葉を耳にする機会が増えた。インターネットカフェや漫画喫茶などで夜を明かす人々のことを指し、その中には雇用を打ち切られ、社宅や寮に住み続けることができず、安定した収入がない人々が多く含まれていた。

しかしながら、今回のホームレスギャルに登場する彼女たちは派遣切りにあったわけでもなければ、リストラされたわけでもない。彼女たちがホームレスになった要因として私が感じたものは環境の問題である。家にはアルコールに依存し暴力を振るう父親がおり、周りには薬物に手を染めている同年代の仲間がいる。小遣い欲しさに違和感を抱くことなく援助交際を始め、その後風俗店で働くようになる。その後職を転々としながら借金を抱え東京へ逃亡をして現在へと至る。日本は戦後急速に豊かになっていった過程で義務教育制度や社会福祉の充実も進んでいった。結果として発展途上国のようなストリートチルドレンや物乞いの姿を目にすることはほぼ無い。しかしながら豊かになっていく過程で格差は拡大していく一方である。彼女たちは現在「移動キャバクラ」から収入を得ている。しかしながらそのお金は彼女たちの金遣いの荒さから残ることはなく、その日暮らしをしているのが現状としてある。彼女たちのような境遇で収入を得るための手っ取り早い手段が自らの身体を商売道具としていくことであろう。しかしながら身体は必ず年

月とともに老いてゆき需要は減少していく。貯金もない彼女たちが、収入減を失った先には今以上に過酷な状態が待っているだろう。

現代日本的貧困の中で育った彼女たちは現在も貧困の中にいる。成長の段階で幼少期の環境がその後と与える影響は大きいだろう。結果として彼女たちは貧困から抜け出せず、仮に彼女たちが子供を持ったとして、現状のままではその子供の育つ環境が良いものになるとは考え難い。

ホームレスと聞くとやはりまず中年以上の、少し言い方は悪いが、薄汚い衣服を身にまとった男性を思い浮かべてしまう。私を含む大半の人間のなかではホームレス＝路上生活者という図式が成立してしまっているのではないだろうか。しかし、この記事で取り上げられている「ホームレスギャル」は私たち一般人のイメージしたホームレス像とはいささか違っているようである。まず「ホームレスギャル」はどのように生計を立てているか。私はホームレスといえばビッグイシューを売っている、あるいは空き缶などを拾って換金して金銭を手に入れているイメージを持っているが彼女たちは違った。彼女たちの"職業"は無店舗型のキャバクラ、移動キャバクラというものだがここから彼女たちの若さと一定の容姿のよさを伺うことができる。というのも、その仕事は当然のことながら中年男性のホームレスには到底務めきれないものであるということだ。断言はできないが「ホームレスギャル」は近頃、といっても00年代以降の日本において顕在化してきたホームレスの形態だろう。そしてその問題は単純な金銭的貧困だけが彼女らをそのような状況に置かせているわけではなさそうだ。本文でも挙げられたように現代の貧困には様々な貧困がある。中年男性のホームレスであれば金銭的な貧困あるいは社会福祉の貧困がホームレスの要因を作り出しているが、ホームレスギャルに関しては教育や発育環境の貧困もあるだろう、つまり幼少期からホームレスの要因になりうるものがそばにあったということである。このことからホームレスギャルをはじめとした若者ホームレスはいわゆるホームレス問題のみならず日本の学校教育、格差といったところまで根を下ろしているということにはならないだろうか。また女性の若者ホームレス問題というところでは援助交際などの性についての諸問題が浮かび上がるなど一口に原因を突き止められない解決の難しさがあるのだと思う。それはホームレス問題に限ったことだけではなく現代に蔓延る社会問題全てに言えることなのだが。

ひとは、「貧しさ」を想像するとき、同時に「豊かさ」を想像せずにはいられない。家がないことが貧しさを意味するなら、「マイホーム」は常に豊かさの象徴として存在しつづける。ではもし、「貧しさ」が不可視になったとしたら？ 「豊かさ」はどこへゆくのか？

池袋のマクドナルドの片隅で「移動キャバクラ」をする少女たちが仮に貧しいとすれば、あるいは貧しくないとすれば、それはどのような根拠に基づくのだろうか。彼女たちが彼女たちの稼ぐことができる以上のものを必要としていないなら、それはじゅうぶんに満たされていると言えるのではないだろうか。

これは想像にすぎないが、彼女たちは所持金すべてを偽ブランド品の財布に入れていて、その金額は、日によってはそこいらのサラリーマン以上になるかもしれないし、日によっては1円玉

数枚になるかもしれない。うまく稼げた月の月収は 20 万円を超えることだってあるだろうし、数万円に満たないなかでなんとか生き抜くことだってあるだろう。

「貧しさ」を改めて実際に定義しようとするなら、それはあるいは持続性の有無という指標が使えるのかもしれない。彼女たちはマクドナルドの店舗を住処兼事務所兼店舗として利用している。しかし、これも都市からあふれ出る富に寄生しているにすぎない。もしマクドナルドが 30 分以上の滞在を拒否するようになれば、彼女たちの生活は崩壊する。もっといえば、彼女たちの女性という「性」を売り物にする「移動キャバクラ」は、よほどうまくやらないかぎり数年のうちに立ち行かなくなるに違いない。彼女たちの生活には数年の期間を見据えて言えば、持続性がない。ゆえに、貧しい、とそのように判断することはできる。

しかしその定義になんの意味があるのだろうか。マクドナルドがそのような措置を取らざるをえないほどに経営が苦しくなったとき、あるいは、マクドナルドの店舗に彼女のような人々があふれかえったとき、私たちの生活もまた崩壊しているのではないだろうか。少なくとも、その瀬戸際に立たされているには違いない。

貧しさは不可視になった。そのことは確かだが、ひるがえってそれは、私たちのほとんどがすくなくとも「豊か」ではないということを示しているのではないだろうか。

近年実現された「豊かさ」の溢れる社会は、同時にヒトや情報の過剰化や個人化（細分化）を推進する。「ノマド」や「フリーランス」と呼ばれ囃される生き方がその象徴的なものだろう。他方で、「貧困」などなかったかのように振る舞おうとする社会のなかで、水商売・性風俗の規制にともなって、インフォーマルなリスクヘッジとして機能していたものが縮小する中、「貧困」にもまた多様なあり方が生まれる。その一部が記事で取り上げられている根なし草の「ホームレスギャル」たちだ。彼女らもまた「豊かさ」と「貧しさ」の間に生まれた「不可視な存在」として社会に息づいている。

彼女らは、豊かな社会の生み出したマクドナルドの 24 時間営業というサービスを利用して住空間を確保している。本来このサービスは、長居しない利用者による衆人環視を作り出すことで、深夜営業の利益を最大限に確保するためのものだが、彼女らは“チート” 的することで自身の利益を最限に確保している。それが社会への利益をもたらすかもたらさないかの差はあるにせよ、だがこの種の本来の用途からは考えられないことというのは豊かな社会の中で「脚光を浴びる存在」がしている行為と根を一にするものではないだろうか。社会の表舞台のど真ん中に立つ「脚光を浴びる存在」と、排除されている「不可視な存在」の両方の生き方の総合したところに、現代社会の傾向のようなものを見いだせる可能性がある。

ダイヤモンド書籍オンラインの読者層ならば「脚光を浴びる」人々についてよく知っているであろう。そういった人々と「漂白される」人々を鑑みることで、「現代社会とはいかなる社会なのか」という問いの答えへと近づく、という道すじが浮かび上がる。しかしこの理論はそれ自体が単純化を前提としている。「脚光を浴びる」の側で起きている個人化と「漂白される」側で起こっている個人化は同質のものだと呼んでしまってよいのだろうか。たまたま同時期に同現象が観測されただけで、それがひとつに帰結するとは限らない。さらに事例を検討していく必要が

ある。

若い女性が、ホームレスとして暮らしていることを知り、大変驚いた。理由は三つある。

一つは、自分自身が抱いていた貧困層のイメージが崩れたためである。私の貧困層のイメージとは、「昔ながらのホームレス」か、ワーキングプアと呼ばれるような「真面目に働いても、豊かになれない」人々のことである。本文の事例のように、若い女性が援助交際や風俗産業といった仕事を自ら選び、生活をしている姿は想像したことがなかった。

二つ目は、泊まる家がない人は、野宿をしているという思い込みがあったということである。現代の東京では数百円あれば一晩、雨露をしのげる場所が手に入るということを初めて知った。また、「マクドナルドへの排除」ということが言われていたが、ホームレスでさえも消費社会に組み込まれていることは、興味深いと感じた。なぜなら現代の消費とは自己のアイデンティティの確立のためになされるものであり、貧困層は消費から排除されていると考えていたからである。そのため、本文の事例の「消費」は、いわゆる消費社会における消費とは、定義が異なるのではないのかと思った。いずれにしても、アイデンティティ確立のための消費だけではなく、モノやカネが社会に行き渡っていくあり方自体を見つめていく必要があることに気づかされた。

三つ目は、私は援助交際や風俗産業で生計を立てている女性は「搾取されている」存在だと思っていた。しかし、文中の「インフォーマルなリスクヘッジ」や「フリーランス化」を読み「搾取する者／される者」のように単純ではないことを知った。

私は、文献を読んで、いかに自分が勝手な思い込みや価値判断によって社会を見ているか、ということが分かった。社会のさまざまな側面に関心を持ち、それが実際どのような姿なのか、見ようとする努力が必要だと感じた。また文中では「周縁的な存在」の姿を目にしたときそれを「例外的な事例」と批判することが、問題を見えにくくする効果を持つ、という主張があった。これは批判が問題についての議論を止めてしまい、その問題について言い出しづらい雰囲気を作り出す、ということであると考えた。「これを言うな」と明確に言われることはむしろ少数事例で、文中の批判のような言葉が、社会では数多く生み出されているのかもしれないと思った。

文中で取り上げられていたのは、わずかなつながりを頼りに「普通の人」としてでない生き方をしている人々だった。しかし、職業の「フリーランス化」は、これまでの社会が不安定化していくにつれ、社会で生きる全ての人に関わっていく問題であるという。自分自身がこれからどうなっていくのか、不安を感じた。(1098字)

リナとマイカがその「性」を売り物に金を得るとするのは、「非行少女」と呼ばれる女たちがするそれとは違って、小遣い稼ぎなどではなく生きるための行為であること、彼女らと違って本当の意味で帰る場所がないことが二人の来歴から窺える。生きる為に二人がここまでギリギリの綱渡り生活をしなければならぬ背景には、低賃金、風俗の浄化作戦による中間集団の解体および個人化があるということで、確かにこれは漂白された社会の「裏」の顔であるように思われる。しかし二人の場合、以前働いていた職場で従業員や客と問題を起こしたり遊ぶためにもっと金が欲しかったりという理由で辞めている。二人がこの状態に至るまでの経緯が、全てが不幸な

ものであったわけではなく彼女らの社会との根本的な関わり方にも問題があった。そこで考えられるのは、この「ホームレスギャル」という問題の本質が二人がこうした商売をして生活していることだけでなく、そもそも二人がこの状態で生活できていることそのものなのではないかということである。「ホームレス」と聞いて思い浮かぶことと言えば、段ボールやブルーシートで作った「家」、あるいはそれさえもない人はベンチで寒さや暑さに耐えて睡眠を取り、まともな飯にありつくことができないというイメージだろう。しかし、二人はそうではない。空調の効いた店内で不自由な体勢ながらも“健康”を保てる睡眠を得、まともとは言えないが生命を維持できるだけの飯にはありついている。服も最低限の質を保っている。この求めやすい安価な商品、そしてそれを提供する快適な場。この一見恵まれたことが（実際二人にとってもある種恵まれていることなのだが）二人が社会の見えなくなっているところで生きていることが浮き彫りにされるのを妨げているのではないだろうか。二人はこの“恵み”のおかげで道端で突如倒れるなどをせず、目立つ形でその「貧困」を社会に出さずに生活できるからだ。これこそ「豊かさ」に漂白された社会というものではないだろうか。

ホームレスギャルの存在は、社会の闇を覗き見する背徳感を我々もたらし興奮させる。このように「活字化」されたドキュメンタリーは、ノンフィクションを謳ったフィクションだろう、と疑いたくなるものが多い。しかしその感情込みで我々はそこに漂っている胡散臭さも楽しんでいるし、それが覗き見を刺激的にさせるのだ。しかしながら、こうしたルポは、取り扱うアウトサイダー達に対する意識的、無意識的に関わらずレッテル張りに終始することが多い。今回の場合では、ホームレス＝我々よりも下等の生物、かわいそう、非人間的な暮らし、というマイナスイメージを彼らに押し付ける作業に留まってしまおうであろう。そうした視点は、アウトサイダーを我々インサイダーの方に引っぱりあげておもしろおかしく描いてみせる、そんな読む価値もないようなそれこそ非人間的な、対象を尊敬する心のかけらも感じられないものだ。それは我々が理解できるように調味料を振りかけて一種のおいしいのエンターテイメントに仕立て上げる。対象と内容が違うだけで、外枠は同じで形骸化している。

そこには弱者と強者の関係が見える、強者が弱者のことを理解したようなふるまいをする。私もあなた達と同じような弱者です、という強者にしか持ち得ない態度を振りまきながら。しかし、彼らのことを弱者であると、認識することこそ、我々が強者である所以なのだろう。

このホームレスギャルの記事では、そうしたジレンマからできるだけ遠い位置に着地しようとする。文章からは、著者が彼女らと接する時の、友人と接するような言葉使いや態度が想像できる。

著者は取材対象に対して出来るだけフラットな視線を向けている。その視点は彼女らの行為を一部賞賛さえしている点に見られる。彼女らは言ってみれば起業家である。オフィスを持たないノマドワーカーである。彼女らは現代の職業のフリーランス化の一例である、とでも言いたげなほど、フラットな視線。

なるほど、こうした覗き見の記事たちは、そうしたスノッブな視点のみに留まらず、彼ら彼女らを反射鏡にして、我々が生きている現代社会というものを照らし出してみる作業なのだろう。

「90年代後半以降、繁華街に対する『浄化作戦』により、『目に付くような』ホームレスや店舗型風俗店、街娼は急激に減少した」とあるように、現代社会における“漂白”は今も現在進行形で行われている。急速に都市化が進む一方で、実際には「リュックサックを背負った中年男性」のような「わかりやすく貧困を象徴する被写体」どころか、リナやマイカのような「インフォーマルなリスクヘッジ」の手段に頼ることすらできない「貧困」の形も噴出し始めている。数百円もあれば「食」と「住」を手に入れられる「快適」な都市空間が、むしろ「周縁的な存在」を際立たせているということに気づかされる。

このような問題は現在の社会問題であると同時に、将来的にもさらに深刻な事態を呼び寄せると想像される。記事の冒頭で、リナとマイカは

「アタシのこと、お姉さんだって」

とやりとりをするが、彼女らが真に「お姉さん」ではなくなったとき、彼女らの生活はどうなってしまうのだろうか。「移動キャバクラ」といった手段にすら頼ることもできなくなる。力仕事にせよ、水仕事にせよ、身体を資本に行われる労働は「若さ」があつてこそ可能な物であるはずだ。

私が製パン工場で短期アルバイトとして働いていた時に最も驚いたのは、同僚たちが皆一様に40代以上の風貌であったことである。夕方の6時から朝方の5時まで働くその仕事は決して楽なものではない。5時間以上立ちっぱなしのまま、熱い鉄の板を運び、パンをこねるその作業は20代の大学生にすら、体力的に厳しいものだった。夜中の12時過ぎに与えられる60分の休憩時間には、狭い休憩室に「おじさん」たちがひしめき、死んだように眠るのである。

生きるために身体に苛酷な負担を強いているようであつて、身体に苛酷な負担をかけるためにしか生きていないような実態がそこにはあつた。リナやマイカのような存在を救い出すためには、何をしなければいけないのだろうか。現代社会の闇を見出し、かつ、その闇から人を救うためには何をしなければいけないのか、そこまで考えを深めていければと思っている。

記事からは確かに、モノの「豊かさ」に「漂白」されかつての代表的な貧困のモデルが影を潜める中で、「個人化」が加速させる「現代の貧困」の姿が具体的な輪郭を持って浮かび上がる。しかし、結論にやや有用性が欠けていると私は思う。

たとえば、現代社会の真実、といったようなタイトルならば、本記事は十分な成果をあげている。記事では、移動キャバクラを営む少女たちの現状を伝え、彼女たちがそこに至ったわけ、そして社会全体の現状を「漂白」という視点から分析している。記事で初めてこれらの現状を知った読者は、目を開かれたような気分になることだろう。

しかし次に、読者はこう思うのではないだろうか。「それで、私たちはどうすべきなのですか？」と。なぜなら、この連載のタイトルは、「闇の中の社会学」である。学問である以上は、まだ言われていない、その書き手にしかできない提案をするべきではないだろうか。

ダイヤモンド・オンラインは、ビジネスマンを中心として幅広い層に読まれている。その中には、この記事を読んで自ら考え、行動できる人間もいるかもしれない。しかし大衆心理として、「漂白」される社会における「現代の貧困」などとある種センセーショナルな言葉で提示された

ら、それを解決しなければならない、という命題を感じる人も多いただろうと私は思う。

だがこの記事は、端的でくだけた言葉を用いるなら、「投げっぱなし」である。現代社会の問題点を鋭く抉っておきながら、問題への対処法は示されていない。もちろん筆者には、問題を解決するという意図はないかもしれない。あるいは、一筋縄でいく解決法はない、と考えているのかもしれない。それでもやはり読者は、寝覚めの悪いような読後感を抱えてしまうのである。

解決法として、思いやりを持ちましょう、のような、耳障りのいい言葉を並べてほしい訳ではない。一朝一夕には解決できないのであれば、それを素直に書いても、読者はある程度納得できるはずだ。ただ、現代社会に「補助線」を引くと言うのであれば、将来的な解決に向けた何らかの展望を示すべきでだと思う。

本来、数学で言う図形の「補助線」とは、問題を理解するためだけに引かれるのではない。最終的には、その問題を解くことを目的として引かれるのである。この記事にも、「問題を解こうとしている」姿勢が必要なのではないだろうか。

普通のバイトに毛が生えた程度、とガールズバーやキャバクラ、そして風俗へと手を出す女の子は少なくない。男性側の意見を聞いてみても、キャバクラや風俗はアウトだけれどガールズバーは許せる、なんて口にする人もいる。しかし、その線引きはどこにあるのだろうか。というか普通のアルバイトとこういったバイトとの境界線はどこにあるのか。ホームレスギャルと称された彼女たちもおそらくはそんな考えを持っていたのではないだろうか。それぞれがそれぞれの道を辿りながらも、大きな流れの中でただそこに行き着いてしまっただけ、というのがこの文章を読んで彼女たちに受けた率直な感想だった。そしておそらくそれはわたしを含む大勢の現代社会を生きる人々に当てはまるものだと思う。ただ流れに従っていたらこの大学へ来ていただけ。ただ流されていたらこの会社に就職していただけ。それらと大した変わりもなく彼女たちはホームレスギャルへとなっていたのではないか。著者も本文の中で述べている通り、現代の日本はまさに先進国の貧困の中にある。街はもので溢れかえり、数千円もあれば十分に数日生きていくことが出来る。そしてそれが尽きたときも次の数日を生き抜くための数千を稼ぐ手段がいくらでもある。だから貧困を切実に感じる事が出来ない。不可視化された貧困はわたしたちを麻痺させていく。彼女たちのような所謂境界線の向こう側にいる人々を取り締まることは容易なことだろう。公園や高架下で眠る分かりやすく小汚い恰好をしたホームレスを退去させるのと同じように彼女たちの商売の場や安息の場を奪えばいい。けれど、そうしないのは今彼女たちが目に見えて無害で少数派だからではなく境界線のこちら側にいるわたしたちが貧困の一種のアイコンとして彼女たちを必要としているからではないだろうか。豊かすぎてその豊かさを理解出来なくなったわたしたちに今の幸福さを実感させ、こちら側とあちら側という境界線を確固としたものにするために我々が意図的ではなくとも彼女たちのような存在を生み出し続けているのだ。

記事を読んでの推測にすぎないが、二人の間には友情とも恋愛感情ともつかない信頼関係があるのだろう。それで、筆者が言う「中間的なセーフネット」であるデリヘルやホストクラブで生きていくことができなくもないが(二人は浪費や客に対する暴力などの問題を抱えながらもそれま

でなんとかそこでやってきたのだから)、理解しあえる「相棒」を得て、生きづらさから逃れ、より自由な生活を選択した可能性がある。経済が高度に発展し、あちこちに 24 時間営業の飲食店やネットカフェ、カプセルホテルのあるいまの都会でなら、若さや身体しか貨幣に交換できるものがない彼女たちが、家も持たずに街を浮遊しながら二人で生きていけてしまう。街にはホームレスの姿が少なくなったが、ネットカフェを定宿として暮らしたりする彼女たちのような目に見えにくい貧困のかたちが増えている。それらは見えにくい分、制度も整えられにくい。そうして生きている若い貧困者たちは、若さや健康を損なえば、身を守るものがなくなってしまう点で、とても弱い存在だ。けれども、「移動キャバクラ」を始める前よりは、彼女たちは幸せかもしれない。前の生活との比較の言葉は記事になかったのでわからないのだが、キャバクラを何度も変わったりしたリナと、ホスト通いを続けるデリヘル嬢だったマイカが、その生活のストレスからふたり一緒に逃れ、「ヨネちゃん」のような「いい客」を相手にしてお金を稼いで気ままに街を漂う生活のほうが生きやすいという可能性は大いにある。

さらに、そうして数百円で食、住、そしてオフィスの役割も果たす場所を手に入れることができるのなら、同じ数百円でパソコン一つ持って WIFI につなぎ、このような貧困に身をさらしている者たちのセーフティネットをつくることも可能になっていると思う。実際そのようなグループは Facebook やネット上のホームページを検索すればいくらでもでてくる。これは、ネット環境が整い、ノマドとかフリーランスとまではならないけれども、なにか空いた時間を利用して個人レベルで社会に働きかけをしたいという人にその手段があたえられたことの利点である。貧困のかたちが変わると同時に、国や社会の制度に頼らず、人と人同士がゆるい輪を作るような形でつながり、補い合うことがしやすくなったということでもあると思う。